

## 面倒な相棒 後編

平成 24 年 3 月 6 日(火)

幻想譚工房

私は証言台に立っていた。薄暗い部屋の向こう側に何人もの裁判員が座って私のことをじっと観察している。

私から見て左手に立っている人がさっきから何かを喋り続けているが、何を言っているのかまったく分からない。

今日までの出来事に私は完全に打ちのめされていた。強くあろうとしていた心は脆く砕け、内側を支えていたはずの芯はどこかへ消えてしまった。

自分が正しいと思っていた事が全て否定された感覚は衝撃的で、今の私には心のよりどころなどない。孤独と絶望、不安と疑惑の合間に漂っていた。

そんな私に追い打ちをかけるかのように、さっきからずっとめまいが続いていた。ただ頭が痛いただけならまだよかった。まず視界がぐるぐると歪んでいる。平衡感覚が正しく働かず、自分の足元を重心に世界が回っているような感覚に立っているのが精一杯だ。しかし何よりも厄介なのは、青い空、赤い血、そしてオレンジの炎がずっと頭の中、視界の中にチカチカとまとわりついて離れないのだ。このフラッシュバックがずっと私の意識に干渉し続ける中、もう 20 分も座りたいのをじっとこらえて立ち続けた。

「——自衛のため発射した弾丸の衝撃で冷却機構が破損し——」

「——おき出しの状態では耐水能力も不十分で——」

私の左側に立っている人が手に持っている文書を淡々と読み上げていく。その言葉の中から、破損とか不十分とか、そんな単語が聞こえてくる度に胸がきつく締め付けられる気がした。

「——以上から電源系統の爆発に至った。相違ないな？」

「……」

「あー、文月君？」

左側の人物……検察官の声に、宙に浮いた感覚が消え視界が元に戻り、現実に戻される。

検察官のほか数人の裁判員が私の事をじっと見ている。さっきから長々続いていた誤作動や爆発とやらについて私がどう思ってるか聞きたいのだろう。

だが今の私の記憶は断片的で正確性に欠ける。当事者の自分ですら大きな疑問を抱いているのだ。

「……わかりません。森の中で魔物を相手にエミリーと一緒に戦っていて、気がついたら島に戻ってきていました」

そう言ったら、周囲からどよめきの音が聞こえてきた。

「静粛にっ。文月君、ひとつ確認しておこう。確かにエミリー君と二人で行動していたのか？」

正面に立っていた裁判長が私の目をじっと見て穏やかに言う。

私はしばらく考える仕草をして記憶を探った。しかしいくら探ったところで意味はない、私の記憶に誤りがないことを確かめるとはっきり答えた。

「はい、間違いありません」

目を覚ますと、知らない部屋で寝かされていた。

「……ここはどこだ？」

確かに少し前までクヴァレやソフィア、そしてエミリーと動作試験をしていたはずだった。森の中で突然五感が遠くの彼方に消え去り、宙に放り投げられたような感覚に襲われた。そして一瞬のうちに知らない部屋に移動していたのだ。清潔そうな薄いページュ色の壁、白いレースのカーテン、白いベッド。まるで病室にいるようだ。

「気がついたみたいね」

ベッドの側に卯月が座っており、プロジェクトのリーダーである睦月が扉の近くの壁にもたれかかって目を瞑っている。

一体ここはどこなのか、そしてどうして私は寝かされているのだろうか。

「私は……」

最後に何があったのか自分の記憶を探ろうとして自分の目を疑った。壁がみるみるうちにねじれ歪んでいく。

そして頭の中に赤い血、青い空、オレンジの炎が交互に繰り返し現れ、耳鳴りがなった。

全身が大きく冷たい手に握りつぶされたような感覚がして、全身に寒気が走る。

「急に視界が歪んで……何が起きているんだ？」

慌てて卯月の方を見ると、卯月も奥に立っている睦月も歪んで見えた

「亀ちゃん、落ち着いて」

「……落ち着いて目を閉じてじっとしている、しばらくすれば収まる」

睦月の言う通り、しばらくじっとしていると耳鳴りが収まった。恐々と目を開くと壁は元の色に戻っており、卯月と睦月もちゃんといる。卯月がほっとため息をついていつの間にかぎゅっと握っていた手を緩めた。

「私は、どうなったの？」

「ソフィアから緊急通報が入って、お前たちを拾った。大陸で事故に遭ったんだ」

「事故……？」

全く覚えていない。私が事故にあったと聞いたところでまるで他人事のような。

ただ……、さっき視界に映り込んだ空、血、そして炎の事を考えると、もしかしたら本当に事故があったんじゃないかとも思えてくる。

「さっきの、視界が歪むのは？」

そう言うと、睦月は目をつぶってすこし考えてから答えた。

「……詳しくは分からない。おそらくお前の脳が極度のトラウマを受けて不安定になっているんだろう、もしそうならば今後症状が反復的に現れるだろうし、完治するには長い期間が必要だろう」

「そうか……」

きっと最後にみた光景が記憶に焼きついているのだろう。でもどうしてここまで強烈に残っているんだろうか。

「そうだ、クヴァレとソフィアと、エミリーはっ？」

考えても答えなど出てこない。自分の無事を確認した私は、三人のことを聞いてみた。私は無傷だが、クヴァレは大けがを負ったはずだったし、後の二人のことも気がかりだ。

「エミリー……新入りの子かしら？ 彼女なら大丈夫よ。それにわんこも軽傷よ。今は隣の部屋で寝ているわ」

「クヴァレは」

「あー、それがね……」

「クヴァレは重傷だ、至近距離で爆発に巻き込まれたから駆動系の被害が特に大きいうえに、基幹系にも若干被害がみられる。今は別棟で緊急手術中だ」

顔を伏せた卯月の代わりに睦月の淡々とした声が状況を説明してくれた。

「……私のせいだ」

「そんなことないわ、亀ちゃん」

「違う！ 私がクヴァレを急かさなければ、私がしっかりしていればこんな事にはならなかったんだっ！」

朝、クヴァレが目にくまを作っていたのを知っている。何度もあくびをしていたことも。ソフィアが毎晩クヴァレのそばに付き添っていたことも知っているんだ。

私とエミリーだけが何も知らず、何も考えずにのうのうと過ごしてきた。

「頭を冷やせ、文月。今は心身に傷を負っているから嫌なことばかり考えるかもしれないが、明日になって顔を合わせれば落ち着きを取り戻すだろう……今日はゆっくり休め」

睦月はそう言って私の肩に手を置くと、卯月を連れて出ていった。入れ替わりで私の主治医が部屋に入ってくると、簡単に私の現状を説明した。

どうやら私は 2 日間もシステムエラーで停止していたらしい。その間に細かな検査をすべて終え、意識の再起動をかけられていたようだった。そのおかげで

記憶が曖昧になり、失われた記憶をシステムが再構築しようとする過程でフラッシュバック……例の発作が起こるとのことだそう。

正直なところ、原理なんかを説明されたところでどうしようもないわけだが、参照した記憶が正しく再現できなければいつまでも発作が続くということにはショックだった。

それはつまり何かを思い出そうとする度にさっきのような発作に見舞われると言うことだ。

その後、事件について何かを思い出そうとするたびに発作に襲われることになった。発作のたびに苦しくて辛い思いが続く、まるで触れてはいけないと警告されているように……。

その後何度も検査を受けたが結果はすべて「異常なし」だった。プロジェクトメンバーの中には私がわざとでたらめを言っていると言い出す者も出てきた。私の中で何かしら異常が起きていることは間違いないはずなのに、それをはっきりと知る者は私しかいなかった……。

「文月君。覚えている範囲でいい。事故が起きる直前、君は何をしていた？」  
話は事故の直接の原因から、直前の私の行動に移っていた。

事故の真因が分かったのだから、あとは私たちの責任問題というところか、まあ程なくして終わることだろう。

「よく覚えていないのですが、エミリーの近くで近接支援を行っていました」

「……その時のエミリー君の様子におかしいところはなかったか？」

「姿勢制御がうまく動作していないのか、動きにくそうでした。特に後ろに引っ張られる感覚が強かったのか、前に歩く時辛そうにしていました」

「それはいつごろからだったかわかるか？」

「クヴァレに武装を取り付けてもらってからです。その時にクヴァレに言えばよかったんですが、魔物が近くまで迫っていたことと、エミリーがそのことを知られたくないと思っていたので、すべてが終わった後に言おうと思いませんでした」

「どうしてエミリー君はそう思っていたんだろう」

「エミリーは普段からクヴァレと折り合いが悪く、衝突することが多かったんです。またほかのプロジェクトメンバーに比べて進捗が遅れていたのも功を焦っていました。それから——」

……待て、どうして私はエミリーのことをこんなに深く知ってるんだ？

次から次へと口をついて出てくるエミリーの情報にだんだん気味が悪くなり、悪心がこみあげてきた。

視覚や聴覚にノイズが混じる。もう自分でもどこをみて何を話しているのか分

からない、それでも私の口はひとりで音を発していた。

「——エミリーはクヴァレに一人前として認められたい、と常日頃思っていました。それが無理をするきっかけになったんだと思います」

「ふみちゃん、無事でよかったっ」

「ぐっ」

検診の帰り、病院の入り口付近でぼうっと外を眺めていると、思い切り背中に衝撃が走った。

どうやら直前の叫び声からソフィアが力いっぱい抱きついてきたらしい。ソフィアはそのまま私の背中にもたれかかってくる。

「ソフィア……重い」

後ろに倒れないように踏ん張った途端に視界がぐらりと歪んだ。一瞬だけ森と空の風景が頭の中によぎる。

「うぐっ」

「どうしたの、まだどこか痛むの？」

ソフィアが慌てて私から離れた、と同時に視界が元に戻った。記憶を探っていた訳じゃないのに、どうして発作が……？

「ふみちゃん？」

「あ……あぁ、すまなかった」

考え込んでしまっていたようだ。振り返ると、ソフィアが抱きついて私に顔を埋めてきた。私もつられてソフィアを抱きしめる。

なるほど、睦月の言う通りだ。ソフィアに触れて、抱きしめたら心を埋め尽くしていた不安や混乱がゆっくりと和らいで落ちていく気がした。

……でも代わりにぽっかりと穴が空いていることにも気づかされて、うつろな気持ちだけが残った。

この穴は何だ、どうしてこんなに気持ちがあつろなんだろう。そう思い穴の中を覗き込もうとして諦めた。発作がおこりかけたのだ。

発作がひどくならないうちに、何か話題をソフィアに投げかけることにした。

「ソフィア、ケガはないか？」

「私は大丈夫よ。……ふみちゃんこそ大丈夫？ 痛いところはない？ ずっと心配してたんだから」

ソフィアが心配そうな目で見つめてきた。

「あぁ、大丈夫だ」

そう言って胸を叩いてみせる。後遺症が残っていることはあえて言わないでおこうと決めた。定期報告が終われば思い出すこともないだろうし、それでソフィアやエミリーに余計な心配をかけることもあるまい。

「そういえば、エミリーは無事か？ あの事故で大きなショックを受けたみたいだから心配だったんだが」

「新しく入ってきた輸送機さんね、着陸に失敗したから落ち込んでたみたいだけど、大きなケガもなく本当によかったわ」

うん？ 脳裏になにか引っかかる物を感じた。エミリーが輸送機型のはずがない、だってエミリーは私と一緒に戦っていたじゃないか。

じわり、と自身の中に動揺と不安が混じりだした。その動揺を煽るかのように視界にノイズが混じりだす。私はとっさに自身の中に浮かんだ疑問を否定したくて、ソフィアに恐る恐る問いかけた。

「……彼女は輸送機型だったか？」

とたんにソフィアの表情に困惑の色が浮かんだ。

「……ちょっと待ってふみちゃん、何かがおかしいわ」

おかしい……？

「どこか、おかしなところがあったか？」

自身の記憶を探る。確かに間違いなくエミリーは私と一緒に戦って……そして

---

「うっっ」

突然痛みが頭全体に走った。耐えられず床に座り込む。

「ふみちゃん、大丈夫！」

ソフィアが隣に座り込んで肩を支えてくれた。その状態でじっとしていると、次第に頭痛が引いて楽になってきた。

「ありがとソフィア、もう大丈夫だ」

そう言ってゆっくり立ち上がる。頭痛は一瞬だけひどく頭の中を引っかき回した後は、綺麗さっぱり消え去ったようだった。

私が立ち上がるのを確認すると、ソフィアが恐る恐る私の肩から手を離し、そのまま二、三步後ずさる。

「……そうだ、明るい話をしましょ。私を看てくれたお医者様がね、すごくかっこいいのっ」

大丈夫だと判断したソフィアが胸の前で両手を合わせて話し出した。が、私はさっき胸に沸いたかすかな疑念が気になってソフィアの話の話を全く聞くことができなかった……。

「ではそこから先を話してみなさい」

裁判長が易しい口調で私の発言を促す。視覚、聴覚に混じるノイズがだんだん強くなってきた。こめかみをおさえながら記憶を辿る。

「突然の戦闘で二人とも FCS を搭載していなかったのも、目視での戦闘になり

ました。私が威嚇射撃をしている間、エミリーは上を向いて……何かを、叫んでました」

視界がぐにゃりと曲がり、血と空と炎が映り込む。だんだん息苦しくなって、額をぬぐうとぬるりとした感触が手の甲についた。立っているのも辛いくらい全身が熱っぽい。

「その直後、突然エミリーが、背後から……魔物の突進を受けました。そして……足に取りついた、魔物に、銃を向けて……」

体がかくりと傾いた。上も下も分からなくなって、何かにつかまろうと手を伸ばした途端、手が鉛のように重くなって空を切る。

視界は闇に閉ざされ、耳が詰まり、意識がだんだん遠くなった。

……………。

「まったく世話が焼ける……。待ってろ、いま外してやるからな」

クヴァレの声が頭の中に響く。その声につられるように目を開くと、私は森の広場に立っていた。あたりの地面はおびただしい血液で染まり、緑と赤の対比が目突き刺さる。

ビリビリと電流が走る音、あたりに立ちこめる黒い煙。エミリーが倒れたときの私の記憶が再現されていた。

そうだ、エミリーの背中中の装備をなんとか取り外さなきゃ。

エミリーの方に振り返ると、10メートル先に放心状態のまま座り込んでいるエミリーの後ろ姿と、エミリーに寄り添って装備を外そうとしているクヴァレがいた。

「今手伝うから待っててくれ」

そう言ってエミリーとクヴァレの方におかって走り出す。長い筒状の装置からは絶え間なく黒い煙が吹き出しており、今にも爆発しそうな危険な状態だった。クヴァレなら難しいが、私の腕力なら遠くに投げ捨てることができるはずだ。クヴァレがエミリーの背中から装置を取り外し、エミリーが引きずられるように仰向けに倒れ込む。そんなエミリーを元気づけるために話しかけようとして絶句した。エミリーだと思っていたのは、私自身だった。

もう一人の私は目をゆらゆらと漂わせていたが、やがて私と目があった。

お前は誰だ、どうして私が二人居るんだ。そう呼びかけようとしても、口が貼り付いたかのように開かない。手も、足も、体のすべてが縛られたかのようにこわばって、時間が過ぎるのがゆっくりに感じられた。

その直後、真後ろで爆発が起こった。

しまった、私が処分するはずが。そう思って振り返り、炎に包まれたクヴァレを見て唐突に既視感にとらわれた。

……いや、実際には既視感ではなかったのだ。私は実際にこの光景を間違いな

く見ていた。エミリーだと思っていた人物が私自身だった事が何よりの証拠だ。私の記憶を第三者の視点で見るという奇妙な感覚に、改めて冷静にこの場を見回すことになってしまった。

"文月"も、クヴァレも、ソフィアも誰も動かない。魔物はとっくの昔に逃げおこせており、時間が止まったような空間で炎だけが燃えている。

もう一度私は"文月"を振り返った。目を大きく見開いて、私……正確には私の反対側に立っているクヴァレを見ている。このあたりで私の記憶が飛んでいることから、彼女の時間はここで止まっているはずだ。では今の私はどうしてここに立ってるんだらうか。

少し考えてこう結論づけることにした。エミリーだ。私の時間が止まっているのなら、ソフィアの言うことが正しいならば、私はエミリーの存在を知らないはずだ。

しかし、私がでっち上げた記憶の中にエミリーはいた。意識は失ってしまっているが、かろうじて動いていた視覚、聴覚がこの後現れるエミリーの存在を拾い上げたのだらうか。

「……ふみちゃん？ クヴァレ？」

木の上に墜ちていたソフィアが意識を取り戻したらしく、頭上から私とクヴァレの名前を呼んでいる声が聞こえた。

きっとここから先は睦月と卯月、そしてソフィアの言うとおりののだらう。私は目を閉じた。炎が燃える音がだんだん遠ざかり、水の中をゆっくり浮かんでいくような感覚に身をゆだねた……。

次にゆっくりと目を開いたら、見慣れた病室が目に入ってきた。

「私は……」

裁判所で倒れて、森の中で三人を見届けて、そしてまた病室に帰ってきたようだった。

試しに記憶を辿ってみても、もう発作が起きることはなかった。もちろん、記憶もしっかり取り戻している。

「……ふみちゃん」

今度は下の方から私を呼ぶ声、上半身を起こすと、ソフィアが私のベッドに突っ伏して眠っていた。

「ソフィア、心配かけたな」

ソフィアの髪を撫でると、ソフィアの顔が少しだけ緩んだ。何か良い夢でも見ているんだらうか。

「目を覚ましたの？」

扉が開いて卯月が入ってきた。



「裁判所で突然倒れたから、慌ててみんなでここまで担ぎ込んだのよ」

「すまない、心配をかけてしまった。でももう大丈夫だ」

「本当に大丈夫なの？」

卯月が疑うような目で私を見る。無理もない、これまで発作も頻繁に起きてたし、そんな中倒れたのだ。

「ああ。ちゃんと記憶も……取り戻したから」

事故で精神的な負荷を受け、さらに記憶を失うというのはおおごとだ。突然治ったなんて言ったところで信じてもらえないのも仕方がないかもしれない。

しかし、卯月の反応は私が思ったものとは違った。

「良かった……」

体の芯が抜けたかのように卯月がぺたんこ座り込んだ。

「事故が起きたときはずっとわごごとを呟いてたし、目を覚ましたかと思ったら記憶がおかしくなってるし、裁判所では突然倒れるし。全くあんたは何度心配かけさせれば気が済むのよっ」

「……すまなかった」

いつも飄々としている卯月が見せた涙に、私はただ謝罪の言葉しか出てこなかった。

それから私は一通りの検査を受けたが、結果はすべて以前と同じ「異常なし」だった。原因不明の奇病は私の中だけで完治してしまったようだ。

そして裁判の結果は、私とソフィアが 7 日間、クヴァレが 21 日間の分限休職になった。ただ『メンテ屋』が居ないので私たちも実質 21 日謹慎のようなものだ。

それから数日が経過した。ソフィアが負ったケガはきれいに治り、私の記憶もすっきり元どおりに戻った。しかし、確実に治りにくい、戻りにくい問題もまだ残っていた。

「クヴァレ君が戻ってきたらまた続けるんでしょう？ 動作試験」

昼ご飯を食べているとき卯月が隣に座っていった。卯月はクヴァレとほとんど面識がないから、あだ名はしばらく保留にするようだった。

「私は……」

確かにクヴァレが復帰したらこれまで通り試験は再開するだろう。調整室で時間をかけて調整して、外に出かけて動作試験を受ける。ただ……。

脳裏に事故の光景がよぎった。ソフィアがケガをして。クヴァレは私をかばって重傷を負った、もうあんな思いはしたくない。

「私は……怖い」

今の私には何も無い。特別プロジェクトチームに選任された自信や誇りが音を

立てて碎け散って、あとには何も残っていない。

結局私は甘かったのだ。自分の役割を認識していなかった。認められたくて先走った結果、クヴァレとソフィアを危険な目に遭わせてしまったのだ。たくさんの武器・兵器を預けられながら、私は虫一匹すら殺さないつもりだったんじゃないのか？

だから威嚇射撃で済ませた。だから初めての殺生で動揺した。

それに、あの時素直に不調を訴えていれば、あのとき背後に気を配っていれば、あの時クヴァレの到着を待っていれば、こんなことにはならなかったんじゃないだろうか……。

「怖い？ どうして？」

魔物に襲われてクヴァレとソフィアを危険な目に遭わせてしまった事は事実だが、経験不足とか、想定外とか、そんな言葉で片付けて次に進みたくなかった。私は次に外に出るときには、あらゆることに柔軟に対応しながらクヴァレやソフィアを守らなくてはならないのだ……。

「すまないっ」

私は席を立つと、食堂の外へと走り出した。大きな何かに押しつぶされそうになって、どこか広いところに行きたくなった。

私は走り続けて研究棟の外へ出た。目の前には空と海が広がっており、遮る物は何もない。それでもどんよりと停滞した空気は私の回りにまとわりついて離れようとしなかった。

「どうしたんだ」

声に振り返ると睦月がこっちに向かって来ているのが見えた。睦月はミスをしていない、いつも冷静で的確な判断を下す。睦月はメンバー全員のあこがれの的だ。でも、時折そんな睦月の表情にかすかに影が差す時があった。ちょうど今、そんな表情を浮かべた睦月が私の隣で同じように海を眺めた。

「……大きな失敗をして不安に負けそうな時、どうやって立ち直ればいい？」

「今回のことか」

そう言うと睦月は。

「お前さんもクヴァレも、失敗を恐れすぎだ。お前たちは自分たちの判断ミスが重なって事故が起きたと思ってる、実際その通りなのかもしれない。しかしこの先似たようなことは何度でも起こりえる」

睦月が一步前に出て振り返った。その表情はすごく真剣で、大きく開いた青い瞳はその先に広がる空や海のように深い。

「経験が不足しているのにその場その場で常に最高の判断をすることなどできない。ならば一度の失敗でくよくよ悩むよりも、しっかり原因を究明して同じ失敗を繰り返さないように努めることが重要だと思わないか」

「それで……いいのか？」

睦月の言っていることは正しい。これまでに同じ事を考えては否定してきた言葉だった。ただ、そうやって考えて出した結論を誰かに肯定してほしかったのかもしれない。

「睦月も、同じ事で悩んだ事があるのか？」

「ああ、しょっちゅうだ。今だって失敗して悩む事も多い」

「そうか」

睦月に話したらあたりを埋め尽くしていた重い空気が徐々に晴れていく気がした。全身にのしかかっている重りがゆっくりと落ちていく気がした。どうも考えすぎるのは私の悪い癖だ。

「……ありがとう。少し、頑張れそうな気がしてきた」

「そうか、また何かあったら俺や卯月に聞きに来い」

「わかった」

そう言うと、睦月が通り過ぎ様に一言残した。

「ああ、そうだ。クヴァレが目を覚ましたぞ。二人で反省会でもやって来い」  
クヴァレが……。

「ありがとう、すぐに行く」

既に実験棟に向かって歩き出している睦月に礼を言うと、すぐに病院棟に向かって走り出した。

睦月に背中を押されてクヴァレのいる病室まで来たが、私は部屋に入れずしばらく扉の前にたたずんでいた。

なんというか、部屋に入るのが怖いのだ。部屋に入ってなんて言葉をクヴァレにかけたらいいのだろう、そんな事ばかり考えて足がすくんでしまっている。手も足も小刻みに震えて止まらなかった。震える左手を胸の前に掲げ、右手でぎゅっと握ると、自然と自嘲に似た笑いがこみ上げてきた。

「亀のくせになんて小心者なんだ」

ソフィアとケンカしたときもそうだったっけ。亀なら亀らしくどっしり構えなさい。そんな卯月の言葉がどこからか聞こえてきそうだ。

「すー……よしっ！」

大きく息を吸い込んで自分に活を入れると、思い切って病室の扉を叩いた。『常に最高の判断を下すことはできない』ならば自分なりにやるだけやってみるしかないということだ。

「クヴァレ、私だ。入るぞ」

そう伝えると、返事を待たずに扉を開いた。

ベッドに横になっているクヴァレは、最後にあった時に比べて相当やつれていた。

自信に満ちあふれ、私と衝突していた時の姿は今のクヴァレからは影も感じられない。

クヴァレは力なく私を一瞥すると、何も言わずに視線を天井に戻した。

「クヴァレ……」

そんなクヴァレにかける言葉をなくしてしまい、二人して無言のまま少しだけ時間が流れた。

「ケガはなかったか？」

最初に静寂を破ったのはクヴァレだった。

「……私のせいで大ケガしたのに、どうして私の心配なんかするんだ」

私の事を心配する筋合いなど無いはずだ。整備不良を隠して任務を続行して事故を引き起こしたんだ。本当ならばクヴァレから責められたって仕方が無いはずなのに……。

「お前のせいじゃない、俺がしっかり整備しなかったのが悪いんだ」

「違う、私がクヴァレの指示を無視して勝手に行動したせいだ。私は早く功績を上げたくて……クヴァレに認めてほしくて、無茶をしたんだ」

そこまで言ったら、クヴァレは一瞬はっとしたような表情になったが、すぐに目を伏せてしまった。クヴァレは私の方向を向くのをやめ、天井とも壁ともつかない方向をぼんやりと見つめだした。

「……俺は過去の失敗を繰り返したくなくて、心を鬼にして仕事に務めたつもりだった」

しばらく押し黙ったあとで、クヴァレは独り言のようにぼそりと呟いた。ここでいう過去の失敗がなんだったかは分からないが、余計な詮索はせずに次の言葉を待つ。

「過去に背負った罪を清算するためなら、どんな事だってやろうと思った。毎晩徹夜もしたし、二人に冷たく当たったりもした。だが……結局はすべて自信を失くした自分を守るためだったんだ。自分の心を苛むものを忘れるために一人作業に打ち込んで、もう相棒を失っても涙を落とさないようにとお前たち二人から距離を置こうとしたんだ」

壁をぼんやりと眺めながら呟いていたクヴァレが、頭を抱えて自嘲するようにククッと声を漏らした。

「初めから失敗すること前提で二人に接していたなんて失礼な話だろう？ チームのムードは陰悪になった上に、連日の徹夜が祟って整備不良だ。滑稽すぎて涙が出るよ」

「……馬鹿、クヴァレの馬鹿っ」

そう呟きながら目がじわりと熱くなる。まずいと思った時にはもう遅く、涙が頬を伝っていた。

「そんな、そんなことを言ったら、私だって同じだ。弱い自分を、守るために、かたくなになって……」

「お、おいっ。どうしてお前が泣くんだ」

クヴァレがおろおろして問いかけてくる。いくら両手で涙を拭いても、まるでダムが決壊したかのように次から次へと涙があふれて止まらなかった。

「大変だったら一緒に協力すればいいのに、辛いことがあったら相談すればいいのに、失敗したら一緒に解決策を考えればいいのに」

クヴァレに投げかけているようで、全部自分に対しての言葉でもあった。こんな簡単なことがどうしてわからなかったのか、それが悔しくて悲しくて、涙が止まらない。

「そのための仲間のはずなのに、自分一人でできると思いこんで……。見栄張って肩肘張って、それで相手を傷つけて。……ぐすっ、お前も私も、大馬鹿者だ」

クヴァレはしばらく無言で考え込んでいたが、私が落ち着いて泣き止む頃合を見計らって意を決したかのように口を開いた。

「文月、お前の言うとおりの俺は馬鹿だからお前を診ることしか能がない。でも、きっとお前を診る事に関して誰にも負けないように努力する。その代わりにお前は俺のことを診てくれないだろうか、そして間違いを犯したら正してほしいんだ」

「……私は亀だなんて回りから言われているが、心まで甲羅で囲うことはできなかった。プロジェクトの方向が変わっても、私だけ変わってなかったんだ。けどこれからはちゃんと心も体も強くなって、今度こそお前やソフィアをちゃんと守ってみせるから、私に力を貸してほしい」

「もちろんだ。そんなお前の強いところ、弱いところを全部ひっくるめて玄武にするのが俺の役割だと思うんだ」

「ゲン、ブ……？」

「知らないのか？ 亀の神様の名前だ」

「亀にも神様がいるのか」

自分から亀と名乗る時、どうしても自虐的なイメージが強かったが、ゲンブという存在を知った事で、少し自分に自信が持てそうな気がした。

「……なぁ、お前の名前はなんていうんだ？ 今の名前じゃなくて、本当の名前の方だ」

「どうしてそれを今聞くんだ？」

「き、聞き忘れていただけだっ。……本名も知らない相手の面倒を見ることはできないからなっ」

そっぽを向いてぶっきらぼうに話すクヴァレ。クヴァレもまた自信を取り戻したのかもしれない。

「私にあんまり自分の名前が好きじゃないんだ。……その、性格と間逆で似合わないから」

「いいから聞かせてみろ」

「……シャルロットだ」

「良い名前じゃないか」

数カ月前まで使っていた名前なのに、ひどく遠い昔に聞いた言葉のように思えた。きっとこれから文月として生きていく決意が固まったんだろうか。不安は多いが、クヴァレとソフィアがいれば大抵のことはうまく行く、そんな気がするのだ。

「よろしく、シャルロット」

「こちらこそ、クヴァレ」

どちらからともなく手を差し出して握手する。この時、はじめてクヴァレを本当の仲間として認識することができたんじゃないかと思う。

「あ、でもこれからはちゃんと文月と呼んでほしい。実名は教えたが、今はこっちが本名だからな」

それから数日が経ち、クヴァレが復帰する日がやってきた。

「ご迷惑をおかけしました、今日からまたよろしくお願ひします」

「おかえりなさい、クヴァレ」

ソフィアが一番にクヴァレの元へ駆け寄っていった。それに続いて私も後を追う。

「おかえり」

「ああ、ただいま」

「戻って早々両手に花ねー」

そういいながら卯月と睦月が私たちの側に近寄ってきた。

「クヴァレ君、初めましてになるのかな？ 私は卯月よ、よろしく」

「その節はお世話になりました。ペリカンさん」

「へ？」

「……ソフィア、本人は知らないみたいだぞ」

「そ、それは本人には言ってはいけませんわっ」

「ちょっとソフィア？ 私がペリカンってどういうことよっ」

「な、何かの間違いですわ」

「こら、待ちなさい」

ソフィアが私たちの元から逃げ出し、卯月がその後を追いかける。

二人を見送った後で、睦月が一步近寄って言った。

「しばらく見ないうちに顔つきが変わったな。神経を張り詰めてる感じがなくなって、表情が穏やかになった」

「そうですか？」

「ああ、もう心配しなくてよさそうだ。文月とソフィアをよろしく頼むぞ」

睦月がクヴァレに向かって右手を差し出した。

「は、はい。こちらこそ」

クヴァレが睦月の手をしっかりと握り返した。何もかもが良い方向に進んでいる。

「ああ、そうだ。文月、お前さんにも用があるんだった」

握手を終えた後、睦月が私の方を振り返った。

「……？ 私にか」

「そうだ。入ってこい」

睦月の声に、一人の少女が背後の扉から入ってきた。

「……エミリーか」

「はい」

少女は消えるような声で私に返事をする、小さくお辞儀した。私は自分よりも二回りも小さい子に罪を着せてしまっていたのか。

「すまなかった、記憶が混濁していたとはいえ、私は自分の失態をすべて君のせいであるかのように振る舞ってしまっていたんだ」

「い、いえ。詳しいことはリーダーから聞いていましたので」

そう言いながら手をぶんぶんと振るエミリーの肩に、睦月が手を置いた。

「エミリーは臨時勤務で我々のチームの輸送を担当してくれることになった。君たちにはソフィアが付いてるから一緒に仕事をする機会は少ないかもしれないが、よろしく頼む」

「よろしく、エミリー」

「はい、よろしく申し上げます」

「さあ、観念しなさいっ」

「うわーん、ごめんなさい」

一通りの挨拶が終わったところで、ソフィアと卯月の方も決着が付いたようだった。

「そろそろお前さん達の相棒を助けに行ったらどうだ？」

睦月に言われてソフィアの方向を見ると、卯月にいいようにこねくり回されているソフィアの姿があった。

「ソフィア、今行くから待っている」

「助けてふみちゃんっ」

「まったく、仕方のない奴だな」

卯月をソフィアから引きはがすために走り出す。これからのぎやかで楽しい日々が始まりそうだ。